

令和8年度 第3回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和8年8月28日（金） 13時30分～16時15分
- 2 場 所 市庁舎6階 6－1会議室
- 3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、奥村委員、小森委員、益子委員
- 4 招聘者 慶應義塾大学 名誉教授 今井むつみ 氏
- 5 傍聴者 一般5名
- 6 次 第 （1）市長あいさつ
（2）協議①「子どもの進路選択を支える学びの接続」
協議②「岐阜市教育大綱一部改定案について」
- 7 議 事

（13時30分開会）

（1） 市長あいさつ

（2） 報告

（3） 協議①

事務局説明（資料1 子どもの進路選択を支える学びの接続）

招聘者講演（資料2 生きた知識を生む記号接地とプレイフルラーニング）

意見交換

協議②

事務局説明（資料3 岐阜市教育大綱一部改定案について）

意見交換

協議①

●益子委員

プレイフルラーニング、記号接地のお話を伺い、記号の世界の中で思考、学習することが自分の中で記号接地に至る理解の仕方の把握につながり、それを常に行うことで、その行為が「分かる」「思考する」ということだと実感を持つことが重要になると思った。そう考えると、正解のない探究学習や、自分の持っているデータから思考したり、計画の立案をしたりする際には、自分自身の中で記号接地ができているのか評価して確認するというステップが非常に大切だと思うが、もしも言葉の習得や記号接地に個人の能力が関係しているとしたら、それは育成、発達し得るものなのかお考えを教えていただきたい。

●今井氏

記号接地は、ある種概念なり記号を経験や身体に結びつけるもので、結びつけただけでは知識にはならず、知識にするにはそこから自分でその経験を拡張しないといけない。イチゴを一度食べて美味しいとなったら、1回の経験で十分かもしれないが、言葉は非常に抽象的である。例えば、片付けという言葉は1つとっても、片付ける場面は広範囲にあり、そのときそれぞれで対象や行為はそれぞれ違うのだから、子どもが親からお片づけと言われても1回で簡単に意味がわかるようなものではない。色々な場面での経験を積み重ねて、結局片付けとはこういうものなのだと仮説を子どもが作ってそれを試していく、使って試していくというようなことをしていくわけである。記号接地は入口であり、そこから経験を拡張するための推論をしないといけない。そこに個人差はあると思うが、それは生まれ持った才能ではなく、どれだけそういう経験をしながら考えるか、思考力によるところがあると思う。思考力は誰にでもあって、どんな子どもでもある種の経験を拡張するってことは必ずしている。拡張する際に、最初からの的を得ることができる子どももいれば、あまり得意でない子どももあり、個人差はあるけれども思考できない子どもはいない。むしろそれをしてしまうのが人間であり、他の動物種に比べて、人間は必ずある種の経験をするとそれを解釈して拡張する。多くの場合、過剰にしてしまうところもあるので、拡張の範囲をどれだけ妥当性を持って狭められたり、絞り込めたりできるかは、私自身は持って生まれ

た能力よりも経験であると思う。

●益子委員

指数関数的になかなか伸びが出ない時期は、自分なりにどうすれば記号接地できるか試行錯誤してるようなフェーズということではよろしいか。

●今井氏

おっしゃる通り。指数関数で停滞する必要な長さについては個人差が確実にあるが、長い停滞が必要な子どもがその後もずっと学びが厳しいかということ必ずしもそうでもない。繰り返していくと、あるところでコツ・学び方が分かってくる。それが色々な場所に転移するので、究極的には学校教育はそういった機会を沢山与えるための場であってほしいと思う。要するに、これからの時代は学ばなくてはいけないことが多様化し、全部を一律に同じような密度で学ぶことは無理であるから、まずは自分の好きなことに注力して、好きなことを夢中で学ぶことが大事だ。そうすると偏りができるのではないかとされるかもしれないが、一つそういうことをしていると、必ず他の場面にも転移する。指数関数的な洞察が生まれるような機会を多く経験していくと、新しいところでもこうやって学べばいいという感覚が知らないうちに身についてくるのではないかと思う。

●奥村委員

小児科で発達外来を診ていると、3、4年生で文章問題が増え、抽象的な概念が入ってくるとつまづくことが多いとの話をよく聞かすが、特性のない子どもでもつまづいている子ども多いかと思う。

生まれてすぐの頃から小学校にあがるまでずっと診ている中で、子どもが言葉を覚えていく様子について、おそらく今まで自分が考えていたことは記号接地の概念だったのを感じた。例えばイチゴでも、お母さんが「甘いね、赤いね」とやり取りをしていく中で、イチゴ、赤、美味しいといった言葉を覚えていく。お母さんは教えている自覚はないけれども、子どもはそうやって徐々に単語を増やしていったコミュニケーションを覚えていくという作業が記号接地ということだと理解した。

子どもは文章題が苦手ということだが、特にコロナ禍前後で子どもの発達が変わってきている。健診にくる3歳児の多くは単語を発し、会話もできるのだが、コロナ禍以降言葉の出ていない子が増えており、言葉や語彙力がないということは先生のお話でいくと読解力もなく、生きた知識もなく、認知もなく学力が下がるということだと思う。昔と異なり、待合室でも親は自分の携帯を見ているだけで子どもは勝手に遊んでいるとか、診察室でも携帯を放せなくなっており、泣き喚いて嫌がるといった状態になっている。生きた力ではなく、SNSから一方的に流れてくる情報を見ているだけで、コミュニケーションが苦手な子や言葉の発現が遅い子が顕著に増えてきている。こういった時代だからこそ増えてきているのか、また、SNSとの付き合い方についても子どものために考えなければいけないことはどんなことだと思われるか。

●今井氏

あくまでも意見だが、コロナ禍前後で大学生の様子も変わったように思う。コロナ禍前後でちょうど生成AIが始まり、あっという間に大学生が生成AIを使うようになり、自分の中でSNS、生成AI、コロナ禍の何に起因するのかわからないが、変わっていることは確かだと思う。高校3年間全く部活が出来なかったような高校時代を過ごした子どもたちが大学に入ってきたときの学生を教えた際には、今までと全然違う感じがした。課題を出しても、明らかに生成AIを使い、表面的に色々な情報を取ってそれを繋ぎ合わせたような回答がでてきた。使い方次第ではあるが、SNSも生成AIも安易に使うと危ないと思う。

小さい頃からスマホ漬けで、親がスマホばかり見ていることは危惧するところだ。子どもは親が大好きだから、親がしていることをしたい。親がスマホばかり見ていると、それが良いことだと思うので、子どももスマホばかりに見るようになり、どんどん悪循環になってくる。私をご紹介したカードゲームを授業で行うと、子どもたちがグループで楽しそうに教え合う。間違っている馬鹿にせず教えてあげる、対面で一緒に遊ぶといった機会は大事だと思う。

●奥村委員

教育における大人の役割は引っ張り上げるのではなく、足場をかけてあげることが大事だというのはおっしゃる通りだと思う。何でも先回りしてやってあげてしまっっては、子どもの心の発達にも影響が出る。もう自分でやったりちゃんとぶつかっても工

夫して乗り越えていく力がつくのか、引っ張り上げてもらえるまで待つて、もうなんか小学校入ったんだから自分であがってきなさいって言われても、どうしていいかわからずにもう閉じこもってしまう。そういう違いもあるので本当、学力だけじゃなくて心にも影響があると感じた。

●今井氏

おっしゃる通りで、親心として失敗させたくないし危ない目にも遭わせたくないから大人が先走りする。危ないこともたくさんあるので、それを予防することは大事だが、度が過ぎると本当に何もできない。怖くて外にも出れないようなことになってしまいうし、そのあたりのさじ加減は難しいと思うが、小さな失敗をして、それを自分の力で何とかできると自信がつく。自信がついて、失敗しても自分でなんとかできると思えば、世界が広がる。今の時代は責任問題がありすぎて、学校で転んで骨折したら、全て学校のせいみたいになってしまうが、もう少し常識の範囲内で対応するような社会になってほしいと思う。

●小森委員

法律も抽象的な概念を扱う分野であり、大学生に民法を教える際にも、社会の中でどのように使われているか、どういった場面で扱うかという具体例や法律家としての自身の実体験に絡めて理解してもらえよう心掛けているが、それも記号接地に通ずるところがあると思い、自分のそういったやり方も含めて裏づけをいただいたように感じている。個人的には、子どもの頃から文章題の問題が大好きであるが、まさに算数数学で抽象的な概念を具体的な事例でどのように使うか、記号接地を問題にしたようなものだと思っており、文章問題が苦手な子が増えているということは、記号接地の考え方が現場で十分に意識されていないということかと腑に落ちた。

認知科学からみた学力の基盤について、語彙の量と深さ、数、量、形などについての日常体験の中で育んだ知識、思考力といったものは、同じ言葉でも文脈や場面、相手、感情によって意味が違いため柔軟に運用していくことが必要で、それらはリアルに人とコミュニケーションしていかないとなかなか身につかない。記号接地の日常体験や具体的なものへの結び付けという話も、豊富な日常体験がないと難しく、リアルな部分がキーワードだと思ったところだ。そうすると、個別最適な学びの中で、岐阜市ではタブレット学習にも力を入れているが、デジタル分野が進行してきている中

で、認知科学における重要な部分の力を身につけるリアルなコミュニケーションや必要な基盤をどのように結び付けていったらよいだろうか。

●今井氏

生成 AI の時代だからこそ、以前よりももっとリアルな体験をしないといけないと思う。バーチャルな体験とリアルな体験は価値が全く異なり、人はバーチャルで体験しても、自分事と思えないところがある。生成 AI を使って抽出をした中から選ぶとしても、良いものを選ぶ力というのは実は非常に高度で、本当に目利きの人は数多くの記号接地を重ね、失敗を重ね、経験を重ね、初めて目利きになれるわけである。そういう経験なしでは、AI で最初に出てきたものを使うだけになってしまう。だから、大人がいかに子どもに付き合えるかが大事だ。効率化は記号接地と逆向きで、指数関数のグラフで示したように、停滞期は必要な事で、そこで学び手が洞察を得るからその後スパートできる。長い目で見ると、そこがないと応用ができない知識を溜め込むだけになってしまうから、子どもがスパートを始めるまで大人が我慢して停滞期に付き合うことが必要。足場をかけてあげるにしても、遅いから早くやろうと急かして教えてしまうと、死んだ知識になってしまう。そういったことはこれまでもあったが、AI によってよりそれが助長される傾向にあるので、使い方が重要になってくる。

●伊藤委員

私も子どもが3人おり、勉強が得意な子もいれば、嫌いな子もいる。先ほど AI の時代だからこそ、経験が大事だとおっしゃられたが、私も AI の時代だからこそアナログ的な要素をしっかり磨くべきだと思う。先生がおっしゃった言葉を運用する力や、数、量、割合をイメージする力は大切だ。会社にも若い従業員がいるが、消費税込3万円の商品があった際に、税抜きの表示をしようとして0.9を掛けてしまう。その場合、税込み1000円の商品の税抜きは900円ということになるが、税抜き900円の消費税分は90円であるから税込み990円になってしまい、その考え方は間違いだというようなイメージができない。すなわち想像ができない大人が増えていると感じている。それは小学生時代の割合や分数を単なる知識で記憶しており、それ以上の応用ができていないからだと思う。もう一度勉強できるかということ、今の岐阜市の教育にはなかなかそういった場所がないのではないかな。隣接地の県立高校で定員の半数しか入学者

がないような学校では、先生の配置は定員数に基づくため人員に余裕があり、高校生になってももう一度分数を勉強するとのことだった。人の配置の余裕があるからこそできるのかもしれないが、市内学校で一度戻って学ぶことがなかなかできていないのが現状だと思う。スタディサプリやタブレットで苦手な問題を集めて行うこともあると聞くが、それではイメージができないと私は思う。だから、これから岐阜市が一貫した学びを展開する強化すべき点については、子どもたちが学んだ知識を拡張して育むために、どこかで自分が苦手なところに戻れるような仕組みを整備できるとよい。そうでないと、アントレプレナーシップ教育についても軽薄なチャレンジしかできないのではないかと思う。色々な挑戦をすることはもちろん良いことだと思うが、高校段階であれば、一生使えるような、あるいはグローバルに使うことのできる知識や教養をしっかりとつけて自分の武器にしていくような学びでなければいけないと思う。その土台をベースにまずは身の丈に合った挑戦を続けていくことが必要ではないか。友達と喧嘩をしたら失敗だとか、問題を間違えたら失敗だとか、失敗じゃないのに失敗とってしまうような環境になってしまっているのです、親も失敗させないように自分たちも失敗しないために逆に挑戦しない子どもに成長してしまっている気がする。色々な知識をつけて、自分でどのように挑戦していったらいいのか、色々な知識や教養を拡張して頑張ることのできる子どもを学校教育あるいは岐阜市全体で育てていかなければいけないと改めて感じた。

●今井氏

まさに学び方を学ぶという点で、タブレットでは色々体験できるかもしれないが、根本のリアル感がない。その原因の一つに、色々な問題が自分の前をただ通り過ぎていくような形で感情が伴わないことがあるのかもしれない。中学生になって割合や分数がわからない子どもが半分はいる。自分ではやり直したいと思っても、自分の中3なのに、小学校3年のことからやり直さなければいけないと言われ、教科書を渡されると傷つくし、嫌だと思ってしまうのは当然だと思う。その点において、分数トランプを中学校でも行くと夢中になるし、中3にもなると勉強以外のところで色々な経験、知恵もあるので飲み込みは早く、何度も繰り返していると理解できてくる。ゲームの場だと隣の子と教えあう、そういった形が学びのやり直しに効果的なのではないかと思いカードゲームを作った。数の量感が算数数学の一番基盤になることは、認知科学でも多くの方が研究して立証されてきていることで、ぜひ使ってみていただきたい

い。

●教育長

子どもの理解が生きた知識になるまでには難しいと改めて感じた。鉄 1kg と綿 1kg、のどちらが重いかという問いは昔からあり、答えは決まっているのだが、子どもたちが理科として捉えてるのか算数として捉えてるのか、重いということに対しての言語としての理解もあって難しいことを思い出した。記号接地という考え方をベースにしながら授業を行うことは大事だと思った。私が中学校で正負の数の計算を扱う際にはトランプを使っており、赤いトランプは借金で、黒いトランプは貯金とすると学力差関係なく理解されやすく、今井先生のカードゲームも面白いと思った。

学びは直線的ではなく、実は多次元、双方向でネットワーク的で、可塑性可変性がある、そこに柔軟性があるものだと思う。人間の発達として、子どもたちも具体的操作から抽象的な推論ができるようになって、機能的な推論が演繹的な思考になっていくのだと思うが、記号接地の考え方を岐阜市の幼児教育から大学までの発達に即した教育に落とし込む際には、記号や言葉とリアルな体験を往還すると考えると、高校生大学生になっても、いつでもリアルに戻ることが大事だという考え方でよいだろうか。

●今井氏

おっしゃる通りで、高校生になったらリアルはいらないという問題ではなく、常に具体がないと学べず、大学生になってもイメージが湧かない。一方で、記号接地に全て経験が伴わないといけないかという、不可能なところもある。特に数は目に見えないから、子どもにとっても理解のハードルが高い。例えば、小学校 1 年生の子どもが 1 をどう理解してるかという、一番少ない数字だと思っている子が多く、数えるときの最初の数だと思う子も多い。子どもが生活をしながら自分で作った理論が間違っていると、その後の理解が雪だるま式に難しくなっていくことがあるので、幼児期や小学校低学年で、遊びを通して数はこういうものだと別の見方ができるとよいと思う。

いずれにしても、教育長がおっしゃったように、分数の難しさは使い分けにある。それは教科書にもあまり書かれておらず、テスト問題にも書いていないので、自分で

ここの文脈ではこっちの使い方だと見極めなければならず、それがまさに今日私がお話した思考の柔軟性や視点を文脈に合わせて変えるといった能力で、それは言葉と一緒に訓練していくことが重要だ。

●市長

指数関数的知識累増モデルは、本当にその通りだと自分が実体験をした一人である。ずっと停滞していて、ある瞬間にどんと上がるときがくる。これを経験すると、人生全てに当てはまるので、どんな時でも正しい努力であれば諦めず続けたら必ず成果が出るから、この感覚を子どもたちが学びの中で持って経験していくと人生を切り拓いていけるのではないかと思う。

学力困難の原因について、今井先生が文章を理解すること、それに関する問題を解くために必要な認知の力が十分育っていない点についてお話され、伊藤委員が基礎的な認知能力を大切にしようのご意見いただいたことはまさにその通りで、探究的な学びをはじめとする色々な協働の学びを実践しようとする際には、基礎的な部分がなくディスカッションしても中身が無いままである。当たり前だが、基礎的な認知能力があったうえでの探究やアントレプレナーシップであるし、お互いの学び合いであるから、子どもたちにもその視点をしっかり持ったうえでの探究が大事だと伝えていかなければいけないと私も思う。その中で、プレイフルラーニングについて説明していただいて、分かりやすく集中できるもの、楽しいものを経験する機会を義務教育の中でどのように得ていくか考えると、これは水川教育長が第一人者だが、藍東学園の朝の会だと改めて思った。楽しいと思うことを学ぶことは、結果的に認知能力を磨いていくことに繋がっていくから、まずは自分の好きなことをとことんやってみるということを教育の中で経験させてあげたいと思うところだ。

記号接地というキーワードをいただいたが、大学改革も進めている中で、まさに今岐阜という都市を丸ごとキャンパスにしようという考え方を持っており、大学の講義室でひたすら学ぶだけでなく、地域コミュニティや観光、企業と絡んだ行政の現場にも触れながら学んでもらおうと考えている。高等教育で記号接地が大事にされないという問題提起をいただいたが、大学の中でも記号接地をしていく方向性はぜひ大事にしたい。

幼児教育の中で、絵本の読み聞かせも積極的に行っている。座学をやることと色々な遊びを通して経験することとの間に、絵本というある意味で仮想空間の中で想像を膨らませて絵本に触れ、子どもたちは学び成長していくと思うが、記号接地と絵本は

どのような関係にあるのかご教示いただきたい。

●今井氏

絵本を読むことは遊びの一つだと思っている。文字や言葉自体が抽象的な記号であり、その中で、絵本の世界では言葉が画一的な意味があるのではなく、世界が広がっていくファンタジーがあり、実際に起こることも、起こりえないことも描かれていて、色々な世界にいくことができる。見たこともない外国の家庭の姿や食べ物、動物が描かれていて、想像を膨らませる。人間にとって想像力を膨らませることは大事のことの1つだ。それは学びを拡張する際にも大事だけれども、人間性においても、物語の中で何人かの登場人物が違う見方や捉え方をするように、多様なものの見方ができることは大事なことだと思う。

絵本の読み聞かせは幼稚園で終わることが多いが、小学校にあがっても大人が子どもに本を読んであげることが大切だと思う。小学校になった途端に、本だけ渡されるようになるが、一つ一つの文字がわかれば読めるわけではなく、流暢に読むためには、運動能力のように練習が必要である。流暢に読めるようにならなければ読書は楽しくないし、流暢な読みを身につけるには練習も時間も必要だ。子どもが流暢に読めるようになり、どんどん本を読みたいようになるまでは、足場架けのように大人が読んであげたらよいと思う。

協議②

●伊藤委員

前回の意見を踏み込んで改定案を作っていただき感謝する。教育を通して岐阜市をどんな街にしたいのか表すものが教育大綱だと思っている。元々の大綱にある一人ひとりの生命の尊厳を大切にすることは変わらない普遍的なもので、それに今回付け加えたものが、子どもも大人も学び続ける今日の先生のお話聞いてただ学ぶだけではなくて心豊かに学ぶとか楽しく学ぶことがとても大切なことですので、ただ学び続ける、生きるために学ぶだけとか、仕事をするために学ぶだけではなくて、やはり豊かに学ぶ楽しく学ぶことも表していただけるようになるのとよりよい。そして、子どもも大人も一緒になってより良い岐阜の未来を作っていくというような流れにしていきたいと思う。

その中で、最近定例会等で報告を受け、懸念していることがある。保護者が子ども

の悩みを抱え込んでしまい、学校ともうまく繋がることができず、問題が雪だるま式に大きくなってしまいうような残念な報告をいただくこともある。保護者が教育を担うことは当然だけれども、それと同時に悩んだときに支えてもらう立場でもあるという点において、岐阜市は弱いのではないかと感じている。不登校やいじめ、学力の問題のほか、私も母親なので悩むことも多々あるので、そのときに支えてもらえるような岐阜市であってほしいと思う。必ずしも学校でなくてもよいと思うし、地域でも教育委員会でもどこでもよいがそれを保障するような街になることを願っている。

●小森委員

全体の方向性について、これまでの議論を踏まえて改定案を作っていたと理解しており、この方向でぜひ進めていただければと思っている。

意見としてお伝えしたい。家庭・地域においては、子どもたちの主体的な学びを育むうえで周囲の大人が自ら学び続ける姿勢を示すことが重要だということが追記され、実現の方策・姿勢にも生涯を通じて学び続ける姿勢の醸成を入れていただいているが、大人も生涯にわたって学び続けることは、具体的にどのような取り組みなのか、どのような行為をするとそういった姿勢が醸成されるのか、私がこれまで関わった各会議の中ではその点が焦点となったことが少なかったように思われ、あまり具体的な姿がイメージできなかった。今回の記載を具体的にするとどのような話なのか、大綱では抽象的な書きぶりがあるが、教育振興基本計画の政策にも当てはまるような的確なものがすぐに見当たらなかったのも、今後検討していく必要があると思っている。

学校・教職員の実現の方策姿勢について、教職員の人材育成に関する一文が、どの言葉がどこにかかるのか、何を充実させることを念頭に置いているのか一見しただけではわかりにくいと思う。

末尾の市長メッセージについて、現行が令和2年の改定をイメージしたメッセージであるとする、今回の改定に併せて検討が必要ではないかと思った。

●益子委員

表現が分かりやすくなった印象で特に修正すべきところはないかと思う。家庭・地域と子どもとの関係において、以前、地域での学生の学びが非常に上手くいっている外国の例を伺った際に、大学がいくら頑張っても駄目で、地域の人たちが、学生の成

長に対する ‘Sense of obligation’ を感じているかどうかが大切であるとのことだった。つまり、地域の人たちが「自分たちが学生を育てている」という感覚を持ってくれるかどうか地域に大学の学生の学びが開いていくポイントだということである。小学校や中学校、高校、市立大学も、これから整備されていくと思うが、教育における家庭・地域の役割と責任に対する意識の向上という一文について、自分たちが育てている子どもたち、自分たちが育てている高校生、自分たちが育てている大学生という感覚を地域に持ってもらえるかどうか、ここに集約されてるというふうに思い、非常に大切な文章だと思っている。

デザインについて、木で表現していただいて分かりやすくなった。各成長段階下部の文章について、小学校は身近な世界を探ると記載があり、小学生が触れる世界は狭いと感じるかもしれないが、今はインターネットで簡単にアクセスできる時代なので、おそらく私達が考えているよりはるかに広い世界を知る手立てがある。中学、高校へ徐々に社会との関係が広がるイメージがあるが、小学校や中学校でも社会との繋がりを作ろうと思えば作ってしまうような社会でもあると思う。20年以上前になるが、理科の先生と話をした際に、慣性の法則を勉強する単元の冒頭にだるま落としが掲載されていた。私はスローモーションでダルマ落としを叩いて落とす教材を作ろうと思い、探したが、どこに行っても入手できなかった。中学校の教科書に載っているものがどこに行っても入手できず、意外と大人が身近だと思って教えているものが、子どもたちにとっては全く身近でないということもあり得る。記号接地の話にもあったが、子どもたちにとって社会との関係をどういうふうに構築したら良いかという点も踏まえて、言葉や内容を今後検討いただければと思う。

●水川教育長

8月31日に中教審の審議のまとめが公開されると思うが、これから約10年間動いていく学習指導要領学習指導要領がいよいよ改訂する際に、今回自らの人生を舵取りする力というキーワードが出てきて注目している。そういった言葉が見える形になってくると、全ての子が選択と行動により、自らの希望あふれる人生を舵取りしていく姿をイメージしたものになるとよいと思う。そのために、各委員もおっしゃられた大人の役割について、大人の背中子どもにとっての未来のモデルであり、大綱の中の文字として出てくるかどうかは別として、大人が自覚を持たなければいけないということを表すことができるとよいと思う。

●市長

小森委員のおっしゃったメッセージ部分は今回の改定で修正したいと思う。次回以降も議論は続くので、委員の皆さんの意見、議論をしっかりと積み上げながら、良いものを完成させたい。